SIENKIEWICZ

✳

KIPLING

シェンキェーヴィチ

✳

キプリング

ノーベル賞文学全集

NOBEL PRIZED LITERATURE

後援

スウェーデン・アカデミー

ノーベル財団

主婦の友社

ノーベル賞文学全集　1

シェンキェーヴィチ
キプリング

訳者　木村彰一
　　飯島淳秀
　　沓掛良彦
　　加藤尚宏

授与演説および受賞演説の収録に際しては、集英社のご厚意を得ました。

昭和47年5月5日　発　行

発行者／石川数雄
発行所／株式会社主婦の友社
東京都千代田区神田駿河台1－6
郵便番号　101
振　替　東京180番
電　話　東京294-1111(大代表)
印刷所／凸版印刷株式会社
製本所／寿製本株式会社
大口製本印刷株式会社
本文用紙／本州製紙株式会社
表紙／日本クロス工業株式会社
クロス
製函／凸版印刷株式会社

© 主婦の友社　1972　Printed in Japan

0397-522018-3062

ノーベル賞文学全集

1

ヘンリク・シェンキェーヴィチ

HENRYK SIENKIEWICZ

1905

ラドヤード・キプリング

RUDYARD KIPLING

1907

The Presentation Speech and Acceptance Speech
Copyright © Elsevier Publishing Co., Amsterdam

La "Petite Histoire" de L'Attribution du Prix Nobel,
La Vie et L'Oeuvre,
Bibliographie
Copyright © Editions Rombaldi, Paris

This collection is published in cooperation with
the Editions Rombaldi.

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

目次

シェンキェーヴィチ

選考経過…グンナー・アールストレーム……沓掛良彦訳…6
授与演説…C・D・アヴ・ヴィルセン……沓掛良彦訳…10
受賞演説……沓掛良彦訳…18

クオ・ワディス

……木村彰一訳…19
人と作品…ジョルジュ・アルベール＝ルーラック……沓掛良彦訳…201
著作目録……木村彰一編…388

キプリング

選考経過…グンナー・アールストレーム……加藤尚宏訳…218
授与演説…C・D・アヴ・ヴィルセン……飯島淳秀訳…224

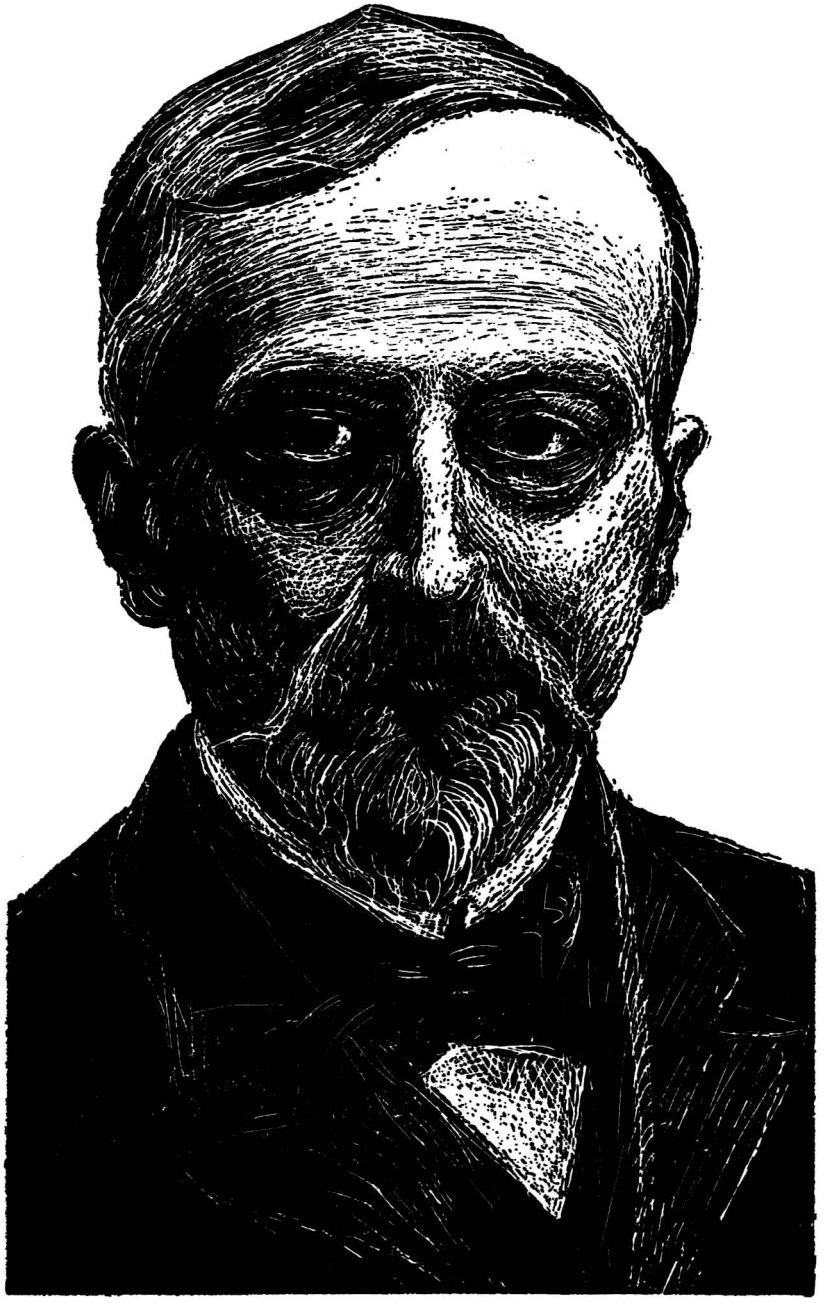
消えた光……飯島淳秀訳…229

人と作品…レイモン・ラス・ヴェルニャス……加藤尚宏訳…373
著作目録……飯島淳秀編…392
肖像画／ミッシェル・コーヴェ……4、216
カラーさしえ／クロード・タベ（シェンキェーヴィチの作品）
……56～57、128～129、168～169、176～177
ジェラール・エコノモス（キプリングの作品）
……240～241、272～273、304～305、368～369

ヘンリク・シェンキェーヴィチ

一九〇五年受賞（五十九歳）
（ポーランド　一八四六～一九一六）

クオ・ワディス（抄）



Henryk Sienkiewicz

シェンキェーヴィチ

選考経過

授与演説

受賞演説

シェンキェーヴィチに対する ノーベル文学賞授与の選考経過

スウェーデン海外文化振興協会
グンナー・アールストレーム

ノーベル賞の初期の受賞者たちは、きわめて尊敬さるべき人物であった。彼らはいずれも、事情に通じた専門家たちによって選ばれた学殖豊かな堂々たる人々であった。権威を認められ高い評価を与えられていたシュリィ・プリュドムは、すでに文学史概論的な臭いを放っていたし、モムゼンのローマ人研究は、大学の古典古代的雰囲気の中で成し遂げられたものであった。白いたてがみをなびかせた老獅子といった感のあるビョルンソンは、スカンジナヴィア諸国以外の大衆の目には、ほとんど歴史的存在と化した護民官、時代遅れのリベラリズムの砦を守る英雄、として映っていた。フレデリック・ミストラルもまた近代詩人としては通用しない。その詩は文献学的知識にあふれ、辞典類をあさる術を披瀝するたぐいのものである。同様にエチェガライの作品を味わおうとすれば、まず、スペイン演劇の高尚な伝統に馴れ親しんでいることが必要であった。要するに、これらの人々の文学は、二十世紀の現実を写すというよりも、むしろ書斎的世界を呼び起こす文学だったのである。

だが、当時のヨーロッパにはそれほどの威厳をもたない作家たちも存在した。彼らは以前から、鋳型にはまった牧歌的教養を打ち砕き、既成概念に満ち満ちた辞書のページを引き裂く火つけ役をしていたのである。ゾラは社会研究の膨大な記念碑を完成したばかりであり、イブセンは心理学的疑問符の立ち並ぶ芝居を創作していた。ストリンドベルィは、大胆に筆をふるって苛烈な闘争を描き出すことによって、論争に加わっていた。そして、ツァーのロシアからは、予言者トルストイの声が響きわたってきた。しかし、これらの先人のうち誰一人として、アカデミーの受賞者名簿にその名が載った人はいなかった。彼らのとった行動は、理想主義の給する奨励金を受けるにふさわしいものとは評価されなかったのである。公の筋では「尊厳」という理念が幅をきかせており、それを打ち破ることはとうていできそうにもないと思われた。

それ故、一九〇五年のノーベル賞選考委員会が、ローマの歴史に立ち戻り、「クオ・ワディス」(Quo Vadis?)というラテン語を唱えることになったのは、ごく自然ななりゆきであった。この小説の主人公は、多かれ少なかれいかがわしいルーゴンあるいはマッカール（ゾラの創作した家族の名）のたぐいの人物ではなく、マルクス・ウィニキウスという名でローマ帝国の軍人という威厳のある人物であった。道徳的責任という謎を押しつけて読者を悩ますレベッカ・ウェスト流の人物はここには一人も登場しない。この小説においては、信仰は昂然と頭を上げて自分の運命に立ち向かってゆく、天上的な崇高さをそなえたリギアのうちに体現しており、哲学は議論家のペトロニウスの口を借りて語られている。だが、遺憾ながらこの小説に盛られた教訓と、ネフリュードフの苦悩との間には実に大きなへだたりがある。たしかに、この小説ではネロの都のさまが全体にわたってくりひろげられており、そこにはほしいままに残酷で、絵画的で、頽廃的で、放火に狂う場面が真に読者の興味をそそるように描かれている。けれども、これらの場面がどことなく博物館的匂いを放っているため、読む者に安堵を与えるのである。結局、アカデミーの意向は、ヘンリク・シェンキェーヴィチとその広大な作品に伴う近代生活の矛盾に注目したのである。

どのノーベル賞受賞作も、なんらかの理由で批判を受けてきた。シェンキェーヴィチもまたその例外ではない。シェンキェーヴィチの場合には、賞が授与されたのは『クオ・ワディス』という作品によってである、ということがすべての人の心の中にしっかと浸み込んでいたので、彼にたいして手きびしい批評を下す人々にとっては有利であっ

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

た。大方の読者の目からすれば、この作品は、偉大な文学と呼ばれるにふさわしい作品であるというよりも、むしろ誰もが読めるベスト・セラーであった。この作品は、一八九五年の発表以後、またたくまに三十カ国に翻訳され、イギリス、アメリカ両国では、わずか一年の間に八十万部を売りつくした。当時の出版界にはまだこのような雪崩のごとき成功の例はなかった。誇り高き天才たちが潜んでいた屋根裏部屋がまだ魅力をもっていたこの時代には、大衆性があるということは、いささかいかがわしいものと思われていた。大衆性とは、つまらぬ俗に堕した趣味から生まれるものだ、と解されることが多かったのである。

加うるに、出版以来、この小説はきわめて思索的、教化的雰囲気につつまれていた、という事情もある。一九〇一年以来、シェンキェーヴィチは、科学アカデミー総裁でありクラクフ大学のポーランド文学教授でもあったスタニスワフ・タルノフスキ伯爵によって、ポーランドからの候補として推薦されていた。伯爵は彼の同国人の「理想家」的性格を強く印象づけたいという気持ちに燃えて、きわめて熱心に、いささか素朴にすぎると思われる文句をかかげてこう訴えた。「現在のところ、『クオ・ワディス』ほどノーベル賞創設者の意図にかなっている作品は容易に見出せないでありましょう。ポーランド語やイタリア語ですでに出版されているように、この作品の青少年向きの版を出すことはきわめて容易でありますから、なおさらのことそう言えるのであります。同様の青少年向きの版はフランスでも現在出版準備中です。」

この方面の作家に、その文学的特質が尊敬に値するものかどうか、という点で難くせをつけたりはすまい。シェンキェーヴィチが描いた広大なフレスコ画が、数ある暴君たちの中でも最も苛酷であった暴君の治政下で、キリスト教が受けた試練のさまを喚起したものであることは否定できない。だが、カエサルの祖国、ティベリス河畔では、文学の専門家たちが、受賞者としてカルドゥッチの名が宣せられるのを年々待ちつづけていたのであった。大胆な詩人の反神学的詩句と、ポーランドの作家の和解的なキリスト教とを対比させること自体が、すでに明らかに一つの挑戦であった。選考結果にたいして、ただちに抗議の声があがった。近代のローマ人たちは、カルドゥッチが受賞できなかった無念の数々を、『イタリア』紙上に掲載された痛烈な記事の中で、まき散らした。いわく、「『クオ・ワディス』は、大デュマの作品を読んでフランス史を知った料理女たちの福音書となった。このように台所の流し場をうろつく女たち向きに改竄され、低俗なセンチメンタリズムをつめこんで、細切れに切り刻まれたローマの歴史が、大衆を魅了したのである。敬虔な女性読者を感動させるために、このポーランド人は、ローマの大火を呼び覚まし、キリスト教道徳の敵、アンチ・キリストたるネロを登場させることをも躊躇しなかったのである。しかし、この作家が非難されたことはといえば、ルナンを深く読んでいたわりには、彼の訳したルナンがあまりに出来が悪い、という点だけであった。彼の『クオ・ワディス』という作品が、ブルワー＝リットン卿の『ポンペイ最後の日』と同様、文学的にはごく価値の低いものであることに気づいた人はごくわずかであった。」

『クオ・ワディス』という作品自体が受ける賛否の議論は別として、スウェーデン・アカデミーが、審査期間中はこの作品の文学的価値を強調しなかったことと、また文学的価値という点を特に重要視しなかったことは正直に認めなければならない。受賞が内定していたこの作家は、事情を心得た上で、全体として評価されていたのである。シェンキェーヴィチを推したのがタルノフスキ伯爵一人ではなかったこともまた強調しておかなければならない。ウプサラ大学教授で、バルト諸国の政治とカルル十二世を専門に研究している著名なスウェーデンの歴史学者が、スラヴ諸国の言語と文化に関して真面目な認識をもっていた。まず第一にシェンキェーヴィチを推したのは、この人物である。彼の筆になる記録は、エッセイ風のものであるが、優雅であると同時に良く事情に通じたものであった。そこには、青年時代の作品も、『ドグマを持たずに』、『火と剣とによって』等の作品も、もらさずリストに載っているのである。

シェンキェーヴィチの名声が高まる上で、作家活動二十五周年を記念して、一九〇〇年に彼が華々しく祝った記念祝典が反響を呼んだ、という事情も一役買っている。祖国の人々が、彼に敬意を表するため

に一体となって、国民全体の贈り物として、彼にワルシャワ近郊のオブレンゴレク城を贈ったのは、この時のことである。ビョルンソンの七十歳の誕生日の折にも見られたのと同様、国民全体によるこの種の意志表示は、感銘を与えずにはおかなかった。国民は、どんな作家でもこのように鑽仰するというわけではない。その対象となりうるのは、国家の象徴ともいうべき存在で、全国民の名誉と栄光たりうる人物のみである。

受賞候補者の資格は、スウェーデン側の配慮によって、毎年更新された。一九〇五年、最終的な選考が行なわれた。十五人の名前が挙がったが、その中には、トルストイ、カルドゥッチ、セルマ・ラーゲルレーヴ、スウィンバーン、キプリングなどの名があった。この機会にある役割を演じたのは、アルフレッド・ヤンセン氏という一人物であった。彼はアカデミーの諮問を受けたスラヴ文学の専門家で、シェンキェーヴィチを翻訳し、スカンジナヴィア諸国に紹介した人であった。この人物が、最後までシェンキェーヴィチを推す主要な役まわりをつとめることになる。長い間意見は割れたままであった。一九〇四年と同様、賞を二分して、半分をポーランドの女流作家エリザ・オジェシュコーヴァに授与したらどうか、という意見も出た。いずれにしても舞台の正面を占めていたのはポーランドとスラヴ世界であったが、これはおそらく、受賞の可能性のないトルストイに対してとられた逃げ口上であった。結局、最後に栄誉に輝いたのは、賞を分割されることなく一人で受賞したシェンキェーヴィチであった。

一九〇五年、世界政治は、感性の上にまで影響を及ぼし、アカデミーの評価もそれに彩られることとなった。注視の的である、名声赫々たるポーランド人に名誉を与えるということは、当時のヨーロッパにおける反動主義の妖怪であったロシアの恐るべき専制政治に忠告を与えることを意味した。同様に、この観点からすれば、『クオ・ワディス』は意外な知謀を秘めた作品であるとも見られる。ネロの頽廃に瀕した帝国の描写は、きわめて現実的な意味合いを帯びたものとなる。ストックホルムでの賞授与は、あれこれと政治的な評論を呼んだ。パリの日刊紙『ル・シェークル』はこの一件を次のように評した。「『クオ・ワディス』は、現代ポーランド文学の議論の余地なき傑作と思われている。というのも、この作品は、一見したところではそうは見えないが、苦悩するポーランドの大作家や秀れた詩人たちに霊感を与えてきた国民的象徴を内に秘めているからである。この観点よりすれば、この書物は、ミツキェーヴィチ、スウォヴァツキ、ボグダン・ザレスキらの愛国的な詩につづくものである。伝統の鎖は断ち切られてはいなかった。頽廃の時代にありながらも、内的生活によって支えられている国民の歴史を描いたこの作品の中に、人々は祖国ポーランドの努力する姿と、絶え間なくつづく虚偽に満ちた暴政にたいする闘いとを読みとって、喜びを感じたのである。」

一九〇五年は、不安と混乱に満ちた年であった。この年、スカンジナヴィアでは、長らくつづいた同盟劇が大詰めを迎えようとしていた。スウェーデンと、ベルドナッテの孫である老王オスカール二世が、以前から熱望されていたノルウェー人の独立を立派に認めた。これは当事者には重大な出来事であったが、世界史的な展望からすれば、それはより大きな破局のかげにかくれてかすんでしまった。日露戦争は終局に近づいていた。一月には旅順が陥落し、三月には奉天の戦いが行なわれた。ロジェストヴェンスキー麾下のバルチック艦隊は、堂々たる隊伍を組んで、ウラジオストック目指してヨーロッパとアジアをめぐる航海に乗り出したが、対島で悲運の最後を遂げることとなった。

同じく一九〇五年、ヨーロッパの巨人といわれた大帝国が実にもろい基盤の上に立っていたことが明らかになり、ウラジーミル・イリッチ・レーニンなる一人物は、ロシアの将来を決する結論を引き出した。ガポン僧正の率いる激昂した民衆はペトログラードから冬宮へと向かった。この時に起こった「血の日曜日」事件は、世界中に大きな反響を呼んだ。戦艦ポチョムキンの乗組員たちもその結論を出し、セバストポールと黒海艦隊では暴動が起こった。ロシア語で歌われる「インターナショナル」の威嚇するようなメロディーが、現実の世界をおおった。飢えたる者たちは立ち上がり、理性はゆらいだ。戦争に敗れたことがきっかけとなって、到るところで圧制にたいする反乱が起こった。

同じく一九〇五年十一月。時局は、ツァーの圧制下にある国の旗手ともいうべき人物に賞を授与するには、いささかも好都合とはいえなかった。ポーランドのロシアの支配下におかれていた地域は騒乱状態に陥り、ストライキが頻々と起こった。戒厳令が布告され、郵便事務はその機能を停止し、ワルシャワとの通信は断たれた。ストックホルムのアカデミーは、特務を帯びた密使としてヤンセン氏を立て、同氏をウィーン経由でクラクフに送ることを余儀なくされた。ヤンセン氏には、オーストリア領ポーランドを通って、受賞者に会い、幸運の知らせを伝える役目が託された。タルノフスキ伯爵と相談した結果、ヤンセン氏は、ロシアの国境を越えて、シェンキェーヴィチにある大切な用件のためにクラクフに出向くように要請した電報を打つことに成功した。数日後鉄道連絡が回復し、シェンキェーヴィチが姿を現わした。十一月二十九日、彼は次のような手紙を書いたが、その文面は、ノーベル賞受賞者の筆になるものとしては異例の、歴史的な記録である。

「この手紙がいささか遅れてお手許に届くようでしたら、お許しください。ヤンセン氏と会ったすぐ後で、私は数日間ワルシャワに呼び戻されていたのですが、あそこでは手紙類が（ことに外国人相手のものは）、たびたび当局の検閲を受けることを知っておりましたので、お手紙を差し上げるのを控えておりました。あのような状況のもとでは、手紙を書いたりしますと、守るべき秘密を指定された日まで守れなかったことでしょうから。」

「再びクラクフに来ております。今とり急ぎ貴下にお手紙をしたためているところですが、貴下の讃辞と善意とに満ちたお手紙にたいし、厚く感謝いたします。」

「貴下がお知らせくださった通知に接し、本当に幸福な気持ちになりました。皆様が私に与えてくださる栄誉ある賞は、私一人のものではないと思うと、いっそう幸福な気持ちになります。私は、この賞はわが国とわが国の文学にたいして与えられたものと考えております。しかしながら、わが国の文学は、長い伝統をもち、豊かで輝かしい文学であるにもかかわらず、その代表的な作家がしばしばロシア人であると考えられていたり、また、（実際に間違えている場合も、わざと間違えている場合もあるでしょうが）ロシア人作家として引用されているほど、世に知られていないのです。」

「いずれにしても、最近は、事情はまったく異なったものになっていることは認めねばなりますまい。スウェーデン・アカデミーの与えてくださるこの国際的な賞は、わが国が世界の知的、文化的運動の中で果している役割と立場にたいする、厳粛な肯定なのであります。」

「定められた期日までに到着するようできるかぎりのことをするつもりです。また、貴国アカデミーならびに崇高なる貴国の皆様にお礼の言葉を述べ、謝意を表明するものであります。」

日が経って、ノーベル賞授与式の十二月十日が迫ってきた。世界政治の状況が、文学賞受賞者の授与式出席を妨げる、というような事態が起こるであろうか？　だがその懸念は消えた。十二月九日の朝、ベルリンからの列車を降りたのは、医学賞を受賞したロベルト・コッホ教授だけではなかった。そこには、友人で彼の作品の仏訳者でもあるコザケヴィッチ氏に伴われたシェンキェーヴィチ氏の姿もあったからである。ノーベル賞の授与式は、アルフレッド・ノーベルの命日に、慣例どおり、とどこおりなく挙行された。

いつものように、大衆の関心は、もっぱら文学賞受賞者に、すなわち、『クオ・ワディス』の作者に、集中した。現われたのは、髪も髭も真っ白の、老いたるナポレオン三世、といった風貌の背の低い人物であった。アカデミー理事長が、彼のために長い演説を行なったが、それは彼の功績を、祖国の文学的伝統を背景にして、分析し称讃したものであった。彼の文学に関してこのように秀れた報告が行なわれた背後では、かのヤンセン氏が専門家として腕をふるったことは、容易に察せられる。熱のこもった、スラヴびいきのこの紹介を聞いて、シェ

1　一八四一～一九一〇。その作品は虐げられた者や貧しい農民に対する同情に貫かれている。代表作は『ニェーメン河のほとりにて』。

ンキェーヴィチが、式につづく祝宴の席で、感動的な演説で応えたことはまったく自然であった。彼は名声のきわみに達した作家としてではなく、解放の日を待ち望む、偉大な国民の代弁者として語ったのであった。列席した人々は、頭上に赤い色を背景に舞う白い鷲を見る思いがした。シェンキェーヴィチはその時、受難に堪える祖国にたいして与えられ、祖国の慰めとなる名誉について語ったのである。

「この栄誉がすべての人にとって貴いものであるとすれば、それはポーランドにとってはなおのこと限りなく貴いものであります。ポーランドは死んだ、ポーランドは疲弊し、隷属させられた、といわれてきました。しかし、ここにポーランドが生きており、勝利をおさめている、という証拠があるのです。ポーランドの成し遂げたことと、ポーランドが生んだ天才との重要性にたいして、世界中の人々が注視する中で、敬意が表されているこの時にあたって、ガリレオのごとく《Eppur si muove》(それでもそれは動いている)と考えないわけにはいきません。」

「この栄誉は私に与えられたものではなく――と申しますのも、ポーランドの大地は肥沃であり、私より秀れた作家にこと欠かぬからでありますが――私は一人のポーランド人として、皆様に熱烈にして真摯きわまる感謝の念を表明したく存じます。最後に、ホラティウスの次のような言葉を借りて、挨拶を終えることにいたします。《Principibus placuisse non ultima laus est.》(高貴の人々を喜ばせたることは、少なからざる名誉なり)。」

(沓掛良彦訳)

シェンキェーヴィチに対する ノーベル文学賞授与に際しての歓迎演説

スウェーデン・アカデミー常任理事
C・D・アヴ・ヴィルセン

一九〇五年十二月十日

陛下
閣下
淑女
紳士各位

一国民の文学が豊かで尽きせぬものであるような国においては、それがどこの国であれ、その国民の存在はゆるがぬ保証を与えられているのであります。と申しますのも、文明というものは、不毛の土地には花を咲かせることができないからであります。しかしながら、どこの国にも、国民精神をその一身のうちに体現している稀有な天才が、何人かはいるものです。これらの天才たちは、自らの属する国の国民性を全世界に身をもって示しているのであります。彼らはその国民の過去のさまざまの記憶にたいして愛惜の念をいだいてはおりますが、それもただひとえに、国民がその将来にたいしていだいている希望を、一層かき立てるためなのです。彼らが得る霊感は、リトワニアの砂漠にあるバウブリスの樫の木のように、過去に深く根ざしてはいるものの、この木と同様、その枝葉は今日の風を受けてそよいでいるのであります。

本年スウェーデン・アカデミーがノーベル賞を授与した人物こそは、まさにそのような、一国民全体の文学と知的文化とを代表している人

物にほかなりません。その方がいまここに出席しておられますが、その名をヘンリク・シェンキェーヴィチと申される方であります。

氏は一八四六年に生まれました。氏の青年時代の作品『木炭によるスケッチ』(一八七七)には、社会の抑圧され、与えらるべき財産を奪われた人々にたいする、深くかつ思いやりに満ちた同情の念が息づいております。氏の初期の作品の中で、読者の記憶にことに強く残っているのは、『音楽師ヤンコ』(一八七九)の感動的な物語と、『燈台守り』(一八八一)の秀れた描写でしょう。短編『タタールの虜囚』(一八八〇)は、後に歴史小説の分野で筆をふるうことになったシェンキェーヴィチ氏の歴史小説家としての片鱗を示した作であります。もっとも、氏が歴史小説家としての技量を存分に発揮するにいたったのは、かの有名な三部作を著わしたことによってではありますが。この三部作のうち、『火と剣とによって』は一八八四年に世に出、『大洪水』は一八八四年から八五年にかけて、最終作である『パン・ヴォウォディヨフスキ』は一八八七年から八八年にかけて、それぞれ世に出ました。これら三部作のうち第一部は、一六四八年から四九年にかけて起こったタタール人の支援を受けたコサックの蜂起を描いたものであり、第二部は、カルル・グスタフにたいするポーランド戦争を扱っており、第三部は、トルコ人との戦争を扱った作であります。かのカミェーニェッツの要塞は、この対トルコ戦争の際に、英雄的にこれを守って戦った後に遂に陥落したのでありました。『火と剣とによって』の圧巻は、ズバラズの包囲と不屈の男イェレーミ・ヴィシニョヴィエツキの内面的葛藤とを描いた個所であると申せます。この個所においてこの人物は、疑いもなく最も知謀に富んだ将軍たる自分が、総指揮権を奪取する権利を有するか否か、内心反問をくり返すのです。この良心の葛藤は、結局は主人公が自分の野心を克服することによって終わりを告げることになります。ついでながら、この三部作において作者は、ズバラズの包囲戦、チェンストホーヴァの包囲戦、カミェーニェッツの包囲戦、という三つの包囲戦を描いているのでありますが、このテーマを扱うに際して、それぞれに異なった手法を用いている、ということも申し添えておきましょう。『大洪水』という作品は、読者の記憶に長く残る多くの秀れた情景を含んでおります。これにはカミチャなる人物が登場するのですが、この男は小説の初めの部分では、王にたいして不遜にも戦いを挑もうという気を起こしている無法者同然の人間なのです。この男が高貴な女性を恋することによってその感化を受け、ひとたびは失った人々の尊敬の念を再びその身に集め、法秩序をもたらす任務において一連のめざましい功績をあげるのです。シェンキェーヴィチ氏の描いた多くの美しい女性の一人であるオレンカは、その信仰心の篤さ、決して堕落せぬ身の堅固さ、献身的な祖国愛によって、読者の心を惹きつけてやまぬ女性像であるといえましょう。この作品に登場する悪人たちでさえも、興味深い存在なのです。この作品には、祖国に背いて兵を挙げたヤヌシュ・ラジィヴィウ公の姿を描いた陰鬱な、実にみごとな情景が見られ、また公が配下の士官たちに、ポーランドを裏切るように誘い込もうと試みる宴会の場面の描写も見られます。裏切り者である公でさえも、それなりの美しさをもった存在なのです。イギリスのさる批評家は、自分の良心と内心激しい論争を重ねた末、自分の起こした反乱がポーランドの大義のためになるのだ、と故意に信じ込もうとするラジィヴィウ公の姿を描き出したシェンキェーヴィチ氏の洗練された心理描写に、注目しております。しかし、公はこの故意の盲目に長い間堪えることができず、後悔の念に抗しかねて死ぬのです。あまり信用のおけぬ、放蕩者のボグスワフ公のうちにさえも、公その人の示す勇気だとか、宮廷風の優雅さとか、快活さにあふれる磊落な性格とかいった、いくつかの魅力的な特徴が認められます。シェンキェーヴィチ氏は、人間を一律に黒白に描き分けるには、あまりにも深く人間というものを熟知しておられるのであります。もう一つのきわだった特徴は、シェンキェーヴィチ氏が常に、氏の同国人の欠陥に対して、決して目を閉じてはいない、ということです。否、氏はむしろ同国人の欠陥に関しては仮借なくこれを暴き、他方ポーランドの敵の能力と勇気をも、正当に評価しているのです。古のイスラエルの予言者のごとく、氏はその同国人にしばしば力強い真実を語っております。かくして、氏はその歴史に題材を得た作品の中で、ポーランド国民があまりにも強く個人的自由を求めすぎることを非難しておりますが、このような傾向こそが、ポーランド人が民族としてのエネルギーを結晶させる上でしばしば妨げとなり、個人の利害を公共の福祉のために犠牲にすることを不可能ならしめてきたのでありました。氏はまた、ポーランド諸侯が互いに相争い、国家の正当なる要求にたいして

進んで順応しようとしないことを咎めております。しかしながら、シェンキェーヴィチ氏は常に愛国者であって、ポーランド国民の勇敢な騎士道精神を、その正当な姿においてたしかな筆致で描き出しており、以前にはトルコ人、タタール人にたいするキリスト教世界の堡塁であったポーランドが、この役割を見事に果たした偉大さを強調しているのであります。この高度な客観性こそまず第一に、シェンキェーヴィチ氏の精神に秘められた英知と、氏の歴史観とを示す証左でありましょう。一人の良きポーランド人として、氏はカルル・グスタフ王のポーランド侵攻を非としなければならないのですが、にもかかわらず、氏はこの王個人が示す勇気だとか、スウェーデン軍勢の見事な規律と統一とかを鮮かに描いているのです。

『パン・ヴォウォディヨフスキ』という作品は、三部作の中では最も出来が悪い作品である、ということは、これまでにもしばしばいわれてきたことです。しかし、このような意見には同意しがたいのであります。このような意見に組しないためには、ヴォウォディヨフスキの妻バシャが、蛇とライオンとの性質を兼ねそなえた狡猾なタタール人アジヤの手から逃れる、あの感動的な話だとか、やさしさと陽気さと勇気とを一身にそなえた、美しくまた勇敢な軍人の妻であるバシャその人の姿を想起するだけで、十分でありましょう。自分の守る砦もろともわが身を爆破によって吹きとばさせようとする直前に、ヴォウォディヨフスキがバシャと別れの言葉をかわす美しく厳粛な場面に見られるように、三部作の最後の作であるこの作品には、やさしい、真に人間的な特徴を描いた場面が、ことに多く登場するのです。勝ち誇るトルコ軍がカミェーニェツの砦を包囲し、救出の手だてはすべて途絶え、悲惨な運命が差し迫っている時、八月のある夜、夫妻は門が壁で囲まれて壁龕のようになっているところで落ち合います。夫は妻を慰め、二人がともに結ばれて味わった幸福の大きさを妻に想い起こさせ、死などというものは、単にこの世からあの世へと移り行くことにすぎないと説きかせるのです。二人のうち、最初にあの世への旅路を辿る者は、ただ他の一人を待ち受けることになるだけだ、というのです。このエピソードは実にすばらしく、また魅惑的です。このエピソードは感傷的ではありませんが、純粋で真実に満ちた感情が豊かに盛られているので、これを読んで感動を覚えずにはいられません。これとはまた違ったふうにではありますが、ヴォウォディヨフスキの埋葬の場面の描写も同様に、壮大なものであります。柩のかたわらで、バシャは教会の敷石の上に身を投げ出して悲嘆にくれています。司祭は、あたかも警報を発するかのごとくタンバリンを打ち鳴らし、死せる英雄に、霊柩台から起き上がり以前と同様に敵と闘ってくだされい、とうながすのです。次いで、このような悲しみの激発を抑えて、司祭は死せる英雄の男らしい勇気と徳を讃え、祖国の危急存亡のこの折に、解放者をつかわしたまえ、と神に祈ります。この時ソビェスキが教会の中にはいってきます。皆の視線がいっせいに彼に注がれます。予言者的な熱狂にとらえられて、司祭は「解放者じゃ！」と叫び、ソビェスキはヴォウォディヨフスキの柩のかたわらにひざまずくのです。

これらの描写は、そのどれをとっても、偉大な歴史的真実にあふれている点できわだっております。シェンキェーヴィチ氏は広く歴史を渉猟し、また歴史家としてのセンスをそなえているため、氏の創造にかかる人物たちは、時代そのままのスタイルで語り、行動するのです。ノーベル賞候補としてシェンキェーヴィチ氏を推した多くの人々の中に、著名な歴史家たちがいた、ということは、はなはだ意義深いことであります。

この三部作にはまた、その新鮮さという点で実にすばらしい自然描写が数多く見られます。『火と剣とによって』の中の、春を迎えて目覚めるステップのさまを描いた、ごく短いけれども忘れがたいあの描写に匹敵するものを、どこに見出せましょうか？　花々は土の中から芽を出し、虫どもはブンブンとうなって飛びまわり、がちょうたちは水面をわたり、小鳥は歌い、兵士たちの群れを見かけると、野生の馬たちはたてがみをなびかせ鼻孔をいっぱいに広げて竜巻きのごとく走り去る、あのステップの春の目覚めを描いたほどの描写をです。

この壮大な三部作のもう一つの注目すべき特徴は、そのユーモアであります。小柄な騎士ヴォウォディヨフスキの姿は、たしかに見事に描けてはおりますが、陽気な貴族ザグウォバの風貌、性格のほうが、おそらくはわれわれ読者の心により強く焼きつけられるのです。これは、うぬぼれが強く、太鼓腹で、酒好きだという点では、フォールスタッフを想起させる人物ですが、両者が似ているのはこの点だけです。フォールスタッフが酒色にふける、いかがわしいところのある人物な

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com